昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和6年3月1日発行 第48巻第3号通巻第558号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

みんぱくは創設50周年を迎えます

# 月刊みんぱく

3月号
2024

## 特集 負の歴史を伝える

巻頭エッセイ　アーサー・ビナード

# 運は天にあり？

アーサー・ビナード　詩人

去年の暮れに宮崎で講演会があって、当日の朝、空港まで友人が迎えにきてくれた。

到着ロビーへ出ると開口一番「アーサーは運が強いから必要ないかもしれないけど念のため、はい」と言われ、龍の刺繍のお守りをわたされた。

そのまま会場へ向かう過密スケジュールだったし、内容の打ち合わせもあり、けっきょく彼女に聞き損ねた。ぼくのどこがどのように「運が強い」と思われるのか。自分では運の強弱の評価がわからず、他者と比較しても無意味だと感じる。ただ、いろんな修羅場を無事くぐりぬけて五十歳をすぎた今、生き延びていることが幸運でありがたい。

次の日は電車で大分まで北上して喋ることになっている。でもサーフィンしたい。ウエットスーツはスーツケースに忍ばせてある。チャンスは早朝の二時間のみ。果たしてそのタイミングで波はあるのか？

「念のため」の龍のお守りを握って頼み、宿泊先近くの宮崎神宮へも深夜に詣でた。すると木崎浜にいい波がやってきてサーフィンおさめができた。客観性はないが、強い「波運」の実例として勝手に受け止めた。

金運、籤運、女運、男運、天気運などなど、どこまでも細分化できる。東京にいるとき、ぼくはどこへ行くにも二十一段変速の愛車にまたがってペダルをこぐけれど、そこで感じるのは「信号運」。

自分の呼吸と脚力と信号機のリズムが噛み合う日は、ほとんどブレーキをかけずにスイスイ行ける。でも引っかかる日はやたらと引っかかり、赤信号で流れをぶつ切りにされてしまう。

思い起こせば去年一一月上旬のある日、天気運が悪く山手線に乗り、車内で妙な広告を見た。『科学がつきとめた運のいい人』なる書物が出版されたらしく、「運は一〇〇％自分次第」「強運は行動の結果です！」と自信満々に断言する。

「科学」と「運」を組み合わせたらペテンになりかねない。なぜなら「運」を定義づけることも証明することもできないから。もちろん物語としては成立するが、科学的根拠は存在しないのだ。

最近この類いの「自己矛盾科学」によく遭遇する。去年一〇月二一日の「週刊現代」の記事では、ノーベル賞の生理学・医学賞に選ばれたカタリン・カリコ博士がこう語った。「ワクチンの効き目は一〇年単位で検証しないと判断できません」

それならどうして受賞がすぐさま決まった？

本物の検証もなく、実態すら不明な研究を、世界的に褒めたたえられて偉人伝まで即席出版されたカリコ氏は、ま、運の強い人と言うことなんだろう。

**プロフィール**
1967年アメリカミシガン州生まれ。コルゲート大学で英米文学を学び、卒業と同時に来日、日本語での詩作を始める。詩集『釣り上げては』（思潮社）で中原中也賞、絵本『ここが家だ――ベン・シャーンの第五福竜丸』（集英社）で日本絵本賞を受賞。文化放送でラジオパーソナリティーをつとめる。翻訳絵本にドン・フリーマンの『ダンデライオン』（福音館書店）がある。

月刊みんぱく
2024年3月号

**表紙**
水俣市明神の個人宅にある「魂石」。企画展「水俣病を伝える」にて展示（熊本県水俣市、2023年）

＊本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

1 巻頭エッセイ
**運は天にあり？**
アーサー・ビナード

**特集 負の歴史を伝える**

2 **伝える情熱**
平井 京之介

4 **パンデミックの世界で ハンセン病を学びなおす**
辻 央

6 **ナガサキを伝える**
調 仁美

8 **小さき者たちの声を拾う**
奥羽 香織

10 **東日本大震災の語り部として**
木村 紀夫

12 みんぱく回覧板

14 推しコレ図鑑
**アーユルヴェーダ化粧品で もっと癒されたい！**
松尾 瑞穂

16 ふらりミュージアム
**オギェン・チョリン博物館**
宮本 万里

17 世界の「乗っちゃえ！」
**女神はロバに乗って**
中野 歩美

18 だって調査だもの
**人食いワニよりおそろしいもの**
福田 雄介

20 ぱくっ！とフィルめし
**極北での救世主、バノック**
岸上 伸啓

21 今月号の地図・編集後記

特集

# 負の歴史を伝える

**肥大化した文明を生きるようになるまでに、**
**人類は数々の重大な過ちも犯してきた。**
**ハンセン病、 原爆、 水俣病、 原発事故**
**そんな「負」の歴史も語り継いでいこう。**
**子々孫々たちが暮らす明るい未来のために。**

茂道漁港での水俣病センター相思社職員によるガイドツアー（熊本県水俣市、2013年）

みんぱく創設50周年記念企画展
**「水俣病を伝える」**

会期：2024年3月14日（木）～6月18日（火）
場所：本館2階企画展示場

## 伝える情熱

平井京之介（ひらいきょうのすけ）　民博 教授

### 類例のない重大な過ち

戦争や災害、公害などの歴史的出来事を「負の歴史」とよぶ。明確な定義はないが、人類が犯した重大な過ちという意味だろう。「人類が犯した」というくらいだから、ただの過ちではない。類例のない過ちだ。

そこにはかならず、その過ちによって身体的、精神的に傷つけられた被害者がいる。おそらくは加害者もいるだろう。自然災害の場合でも、人為的なミスや怠慢などによって被害が拡大した場合、そこに加害者がいることになる。二度と悲劇を繰り返さないために、そうした過ちの歴史を伝えることが大切だ。

### ごまかしに抗う

負の歴史を伝えるのはだれか。ほんとうは加害者に伝える義務があると思う。しかし、証言するのはたいてい被害者である。ほとんどの加害者は口をつぐむ。なかには自らに都合の悪い事実を意図的にねじ曲げて伝える加害者もいる。

負の歴史は、多くの場合、被害者個人の悲しみや怒りの物語として伝えられる。それゆえにこそ、伝わる力をもつのだろう。被害者は、時間の経過や痕跡の消失、社会的関心の低下、ときに加害者のごまかしに抗（あらが）って、伝える。なかったことにしないために。自らの存在理由を確かめるために。それには相当の精神力と体力を必要とする。苦しくなった被害者に代わり、第三者が彼らの物語を引き継いで証言することもある。

もちろん伝わらないことも少なくない。伝え手の多くはむしろうまく伝わっているとは感じていない。うまく伝わらないからこそ、情熱が保たれるのかもしれない。

### 語り部とガイドツアー

では、なぜうまく伝わらないのか。理由はいろいろとある。ひとつには、原因が複雑で絡まり合っていたり、長期にわたる歴史的変遷があったり、結末があいまいだったりすることがある。単純な物語に還元できないことは、伝わりにくさの原因になっている。

また、負の歴史と聞き手の生活があまりにかけ離れていて、自分のこととして聞いてもらうことができない、ということもあろう。子どもたちに水俣病を伝える活動をしている友人がいう。

「先生はすぐ自分の課題として受けとめろというけど、水俣病事件なんか自分の課題になるわけないんだよ。経験もなければさ、親戚にもいなければ。自分もいま聞いているだけなんだから」

上：民博が協力した水俣病歴史考証館「ネコ実験の小屋」の修復作業（熊本県水俣市、2021年）
下：水俣病センター相思社職員による水俣病歴史考証館での展示解説（熊本県水俣市、2013年）

そのとおりに違いない。聞く耳がなければ、伝えることはむずかしい。

じゃあ、どうするか。聞く耳をもってもらうためのいろいろな工夫が、伝える現場でなされている。証拠となるモノを示したり、写真をみせたり。決定打とはいかなくても、いくつかの方法にはそれなりの効果がある。水俣での調査経験からいうと、語り部とガイドツアーは伝える力をもつ媒体としてかなり有効だ。その理由は、伝える人の情熱が目の前で示されることにあるんじゃないかとわたしは思う。内容以上に、情熱それ自体が聞き手に伝わるからではないか、と。

こんなことを考えながら、本特集では、負の歴史を伝える活動に従事する四名の方に、それぞれの現状と課題を紹介していただいた。伝える活動がいかに個人の情熱に依（よ）るものかが、わかっていただけるんじゃないかと思う。

### 関連略年表

| | | |
|---|---|---|
| 1930 | 1931 | 「癩予防法」公布。全発病者の療養所隔離が定められる |
| 1940 | 1941 | アメリカでハンセン病のプロミン治療が始まり、劇的な効果を上げる |
| | 1945 | 広島・長崎への原爆投下 |
| 1950 | 1956 | チッソ附属病院が水俣保健所に奇病発生を報告（水俣病公式確認） |
| 1960 | 1961 | 琉球政府「ハンセン氏病予防法」公布 |
| | 1968 | 厚生省、水俣病の原因を新日本窒素水俣工場の工場排水によるものと発表 |
| 1970 | 1972 | 沖縄返還 |
| 1980 | | |
| 1990 | 1996 | 「らい予防法」廃止 |
| 2000 | 2001 | ハンセン病違憲国賠訴訟、原告勝訴判決確定 |
| | 2003 | 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館開館 |
| | 2004 | 水俣病関西訴訟で最高裁、国と熊本県の責任を認め、賠償を命じる |
| 2010 | 2011 | 東日本大震災・福島第一原発事故 |
| | 2015 | 沖縄愛楽園交流会館開館 |
| 2020 | | |

特集 負の歴史を伝える

# パンデミックの世界でハンセン病を学びなおす

辻央（つじあきら）
沖縄愛楽園交流会館 学芸員

国立療養所沖縄愛楽園全景。2023年10月現在93名の回復者が暮らしている。右奥の赤い屋根の建物が交流会館（沖縄県名護市、2018年、沖縄愛楽園自治会提供）

## 回復者が開設した資料館

約四年にわたりわたしたちの暮らしを覆い、さまざまな制限をもたらしてきた新型コロナウイルス感染症。この感染症の法的な位置づけが、二〇二三年五月に変わった。課題はあるものの、ようやく世界はコロナ禍前に戻りつつあるように見える。今ほど感染症や感染症をめぐる問題が、遠い世界や過去の話ではないと多くの人が実感をもった時代はなかっただろう。

この実感こそが、ハンセン病をめぐる問題とあらたに、そして改めて出会う可能性を大きく広げる鍵となっていると感じる。それにしても、この四年の翻弄された経験からわたしたちは何を学んだのだろうか。

在園者で組織する愛楽園（あいらくえん）自治会を運営主体とする沖縄愛楽園交流会館は、二〇一五年に開館した新しい資料館である。在園者が四〇年以上前から、歴史や体験を伝えようと構想し、公園化してきた「愛楽園発祥の地」ととなり合う場所に交流会館は建てられた。

## 不明とされた歴史

資料館構想は、ハンセン病回復者が原告として法律「らい予防法」を問う国賠訴訟とその判決を機に、具体化が進む。「らい予防法」は、一九九六年までわたしたちの国に存在した発病者の終生隔離を定めた法律である。二〇〇一年五月の熊本地裁判決は、「らい予防法」の違憲性や有効な治療薬の開発等により遅くとも一九六〇年には制度変更が必要であったと認めた。しかし、一方で本土復帰前の沖縄については不明であると述べていた。

不明とされた歴史を自らの手で残そうと愛楽園自治会は、宮古南静園自治会と共同で市民参加型の聞き取り調査を始める。五年をかけ、三冊の『沖縄県ハンセン病証言集』を刊行するが、その過程で集められた資料や証言記録が資料館の礎となった。また、プロジェクトそのものが体験者の記憶や体験を非体験者と分かちあう大きな役割を果たした。

## 誰もが生きやすい世界に

交流会館は、毎年夏の教員向け講座や企画展（テーマはハンセン病にとどまらない）の開催、回復者の講話、常設展示の解説、学校への講演活動等をおこなっている。歴史を伝え、残すだけでなくわたしたちとともに社会で暮らす回復者やその家族が当たり前に暮らせる社会実現のための役割が資料館に期待されている。

そのような社会実現のためには交流会館の取り組みだけでなく社会教育、学校教育の双方で感染症やハンセン病をめぐる問題について学びやすい環境を整え、特に子どもたちが学ぶ選択のひとつとして、制度化していくことが重要だと感じる。それは、子どもたちと同様、学ぶ機会のなかった現職の教員たちが、学べる／学ぶ環境を制度として位置づけていくことが必要になる。

ハンセン病をめぐる問題は、医療も過ちを犯す可能性があることや人間の愚かさ、悲しさ、強さを学ぶ源となる。ウイルスによるパンデミックが起こり得るわたしたちの世界の未来を見据え、感染症をめぐるあらたな排除や差別偏見をなくしていく誰もが生きやすい世界につながる参照点となるだろう。コロナ禍を経験した現在、ハンセン病をめぐる問題を学ぶ意義も更新されなければならない。

上：回復者の講話。回復者の講話や学芸員による解説をおこなっている
下：常設展示室、沖縄戦時下のコーナー。在園者は園長命令に基づき壕掘りをおこなった。米軍の空襲により施設は徹底的に破壊された
（どちらも沖縄県名護市、2016年、沖縄愛楽園交流会館提供）

約500名の遺骨が眠る納骨堂前での説明
（沖縄県名護市、2022年、沖縄愛楽園交流会館提供）

### 愛楽園とハンセン病政策の沿革

| | |
|---|---|
| 1873 | ノルウェーの医師ハンセンが病原菌を発見 |
| 1907 | 「癩予防ニ関スル件」公布 |
| 1931 | 「癩予防法」公布。全発病者の療養所隔離が定められる |
| 1938 | 国頭愛楽園開園 |
| 1941 | アメリカでプロミン治療が始まり、劇的な効果を上げる |
| 1944 | 沖縄島で日本軍による患者強制収容がおこなわれる |
| 1945 | 沖縄戦により施設壊滅。入所者 289名が亡くなる |
| 1949 | 愛楽園でプロミン治療が始まる |
| 1958 | 第7回国際らい会議で特別法による発病者の療養所隔離が批判される |
| 1959 | WHOらい専門委員会がハンセン病患者の差別法撤廃を提唱 |
| 1961 | 入所者の反対を押し切り、琉球政府「ハンセン氏病予防法」公布 |
| 1996 | 「らい予防法」廃止 |
| 2001 | ハンセン病違憲国賠訴訟、原告勝訴判決確定 |
| 2004 | 愛楽園と南静園の沖縄戦戦没者、平和の礎への刻銘始まる |
| 2009 | ハンセン病問題基本法施行。地域に開かれた施設として療養所が位置づけられる |
| 2015 | 沖縄愛楽園交流会館開館 |
| 2019 | ハンセン病家族訴訟、原告勝訴判決確定 |

右頁：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の追悼空間。正面奥の棚には原爆死没者195,607人（2023年現在）の名簿が収められている（長崎市、2023年）

# ナガサキを伝える

調（しらべ） 仁美（ひとみ）
公益財団法人 長崎平和推進協会 平和案内人

## 平和案内人として

長崎原爆資料館には、約一三〇点の被災資料が展示されている。頭蓋骨が付着した鉄兜（てつかぶと）、焼け焦げた衣類。これらは戦時下の庶民が生きた証（あかし）であり、突然彼らがその命を奪われたことを如実に物語る。しかし、「熱線の影響」という展示テーマのなかで扱われ、解説には持ち主についての言及はない。

被爆体験継承の難しさのひとつに、原爆被害の多様性が挙げられる。理論や数値であらわされる核兵器の科学的側面、また人命の損失や家庭の崩壊などの社会的側面、さまざまな要素を総合的に考え、柔軟な思考で「自分ごと」としてとらえてもらうための技量が伝える側にも必要となる。

厚生労働省所管の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館は、原爆死没者名簿や被爆体験記などを収蔵している。同館は二〇一八（平成三〇）年よりあらたに被爆者から受け継いだ体験を語り継ぐ「家族・交流証言講話」、被爆者の体験記を朗読する「被爆体験記朗読会」の無料派遣事業を開始した。被爆者に代わり被爆者の家族、または所定の研修終了者を、各地に派遣する取り組みである。わたしは二〇〇五年から、平和案内人（原爆資料館や被爆遺構案内のボランティア）として活動を続けながら、この事業にも参加している。

中央は、爆心地から1.2キロの建物内で被爆した際に着ていた義理の叔父のシャツ。2週間後に亡くなる（長崎原爆資料館、2023年）

講話で使用する、長崎の観光名所や名産のスライド

戦時中の中学生の制服（実物）を見せながら当時の生活を考える（諫早市立上諫早小学校、長崎県、2023年）

## 未来は変えられる

県外で講話する際は、まず長崎の観光名所や名産の紹介をし、緊張を和らげる。被爆体験は確かに悲惨であるが、わたしたちは絶望を語り継ぐのではなく、変えられる未来を目指している。そのために、今の長崎の魅力を伝え、被爆地であるナガサキにも関心をもってもらうことが重要である。被爆から七九年が経ち、被爆者が高齢化しているだけでなく、戦争を知らない世代が被爆者の体験を想像しづらくなっていると感じる。

我が家には、被爆死した義理の叔父の制服が残されており、講話の際には触ってもらうこともある。実物に触れることで、過去の出来事がリアルとなり、歴史をより身近に感じてもらうことができる。終了後は可能な限り質疑応答の時間を設ける。質問は多岐に渡り、わたしたちも常に情報に敏感である必要性を感じる。この時間は疑問の解消のみならず、心理的不安の解消にも役立つようだ。

二〇二三年三月、北海道旭川（あさひかわ）市の中学三年生の女子生徒から派遣依頼があった。自分が関心をもつ被爆の実相を、卒業前に同級生と一緒に聞きたい、との要望である。企画立案、学校への許可、当日の司会進行など、生徒の行動力を始め、学校の協力体制も見事であった。無料派遣事業は、発想次第で学びの可能性が広がる土壌になり得る、と実感した。

この事業により、全国的に平和学習の機会は着実に増加した。しかしまだ活動の余地はあるはずだ。わたしは他にも同志一〇人とグループを結成、小中学校を中心に「出前講座」と銘打ち、年間約四〇件の平和講座を実施している。今後も行政や公私の各団体があらたな発想で模索し、可能性を切り開いてゆくことも、また重要ではないだろうか。

中学3年生対象の「被爆体験朗読会」で語る筆者（旭川市立六合中学校、北海道、2023年）

# 小さき者たちの声を拾う

奥羽香織（おくば かおり）
一般社団法人 水俣病を語り継ぐ会

## たまたま水俣に住んで

水俣に住み始めて一〇年が経つ。友人に誘われて、水俣病を語り継ぐ会の活動にかかわるようになって八年程になるだろうか。水俣病を語り継ぐ会では、経験を後世に伝えるために、水俣病の講話、朗読会の開催、通信の発行、他の団体と協働した紙芝居やテキストの作成などをおこなっている。

わたしは、夫の転勤に伴い、たまたま水俣に住むことになった。水俣病について、メチル水銀が原因で、チッソという会社が起こして、裁判が続いていることくらいは新聞やニュースで知っていたが、それ以外のことは水俣に住みながら学んでいくことになった。そんなわたしが語り継ぐことに携わるようになって、すぐに悩みにぶち当たった。「わたしに、水俣病を語り継ぐことなどできるのだろうか」と。

高校での水俣病の授業の様子（熊本県立水俣高校、2023年、林美帆撮影）

水俣湾フィールドワーク（熊本県水俣市、2023年）

## わたしが読む水俣

わたしは、水俣病の被害者でもその家族でも、被害を受けた方々を支える支援者でもない。本を読み、どれほど聞き取りを重ね、想像力を働かせても、被害を受けた方々の苦しみや悲しみをわたし自身の苦しみや悲しみとして話すことはできなかった。

水俣病を日本社会に伝えた水俣出身の作家・石牟礼道子（いしむれみちこ）は「ただ悶（もだ）え加勢すればいい」と言ったが、悩みながらも少しずつ活動を続けていくなかで、今は「わたしがわたし自身の歴史のなかに読んだ水俣」を伝えようと思っている。

わたしは、鹿児島県徳之島の生まれだ。父方は漁民だった。漁民の暮らし、漁村の風景、匂い、漁民への陸の人たちのまなざし、そんなわたし自身の原体験が水俣の歴史と呼応し、わたしが読む水俣は広がっていった。

## 紙芝居「みつこの詩（うた）」

水俣でも、水銀被害を受けた当事者は年齢を重ね、語れなくなりつつある。六〇年以上前に起こった出来事と今の暮らしの隔たりも大きくなり、そのすきまを埋めることが必要になってきた。けれど、今ならまだ間に合う。小さき者たちの声を拾うことができる。

二〇二三年春、わたしは水俣湾のほとり、明神に暮らした大矢ミツコさんの人生を紙芝居にした。水俣病を必ず学習する小学五年生に、水俣の出来事やそこで暮らした人をもっと近くに感じてほしかったからだ。紙芝居の完成はもちろん嬉（うれ）しかったが、わたしにとっては、完成までのプロセスがとても重要だった。ミツコさんが生まれた一九二六年からの人生を丹念に追い、写真を拝見しながら、暮らしの見取り図を描き、どんな季節にどんな花が咲き、家の畑では何が採れたのかまで、時間をかけてゆっくりゆっくりミツコさんその人と向き合った。そして、それを物語にまとめた。今まで「わかったつもり」になっていた一人の方の人生が、より豊かにより立体的にわたしのなかで立ち上がった。それをことばに編んでいった半年間が、わたしが語り継ぐ会の活動を続ける礎になっている。

近代の矛盾、国家とは何か、経済と環境、人の在り方、赦（ゆる）すとは何か、自然と人の関係など、水俣をとおして考えるテーマは多岐に広がる。わたしたちが暮らす現代の足元を照らし、これからの未来をどう作っていくのか。これからも水俣を考えてくださる方々と一緒に、わたし自身も考えていきたい。

**紙芝居「みつこの詩」**
みつこは18歳。となり町から水俣湾のほとり、明神（みょうじん）にお嫁に来ました。
夫になる大矢二芳さんは、チッソ水俣工場で働いています。
しばらくして、明神の海におかしなことが起こり始めます……。

脚本：吉永理巳子、奥羽香織　絵：上月ひとみ
発行：水俣病センター相思社、2023年

年に一度の「早春の朗読発表会」
（熊本県水俣市、2023年、森田具海撮影）

# 東日本大震災の語り部として

木村紀夫（きむらのりお）
一般社団法人 大熊未来塾 代表

福島第一原子力発電所から4キロメートルに立地する熊町小学校にて、語り部ガイド（福島県 大熊町、2021年、大熊未来塾関係者撮影）

## 五年九カ月後

二〇一一年三月一一日に発生した東日本大震災により、福島県大熊町（おおくままち）の海沿いにあったわたしの自宅は津波に流され、さらに家族三人、父、妻、当時七歳の次女汐（ゆう）凪（な）を犠牲にしてしまいました。自宅から北へ三キロほどのところにあった東京電力福島第一原子力発電所の事故により、三月一二日には全町避難となり、それ以降津波犠牲者の捜索もできない状況が続きます。行方不明の家族三人を残したまま、わたしは生き残った母と長女の避難を優先します。岡山県美作（みまさか）市にある妻の実家に二人を託し、福島に戻ったのが三月一八日。三人の捜索を開始しますが、四月一〇日に自宅から南に約四〇キロ流された海上で妻の遺体が発見されます。四月二九日には、自宅前の田んぼでうつぶせに倒れている父の遺体が見つかります。その後、五月二〇日ごろからやっと自衛隊が捜索に入りますが、それでも次女汐凪の遺体は見つかりません。彼女が見つかったのは、震災から五年九カ月後の二〇一六年一二月九日。自衛隊が捜索に入ったときに片づけた瓦礫（がれき）の山のなかからでした。自衛隊も見落としていたのです。

ミッキーのぬいぐるみが付いたマフラーのなかから汐凪の首の骨が……（福島県 大熊町、2016年）

## 一三年という時間

現在でも、彼女の遺骨は二割ほどしか見つかっておらず、定期的に捜索を続けています。しかし、一部しか見つからないことで彼女の存在が現代社会へ警鐘を鳴らしている、そんな気がして、今はむしろ伝承に力を注いでいます。

二〇一一年三月一二日に全町避難になってしまった大熊町では、徐々に規制も解除され、現在は約一一〇〇人が生活しています。しかし、そのうち七〇〇人以上が原発作業員など仕事のために住んでいる人。大熊町民は四〇〇人ほどですが、そのうち二〇〇人以上は震災後の移住者。震災前からの住民でいえば、二〇〇人足らず（全町民の二パーセント）しか帰還できていません。一三年という時間とともに、帰る選択ができない状況が生まれています。大熊町も今は、帰還よりもむしろ、移住者を増やすことに力を入れているように見えます。帰還困難区域が徐々に解除され、復興が進んで良かったねという話では決してないのです。

上：今も続く捜索。探すという行為も慰霊だ（福島県 大熊町、2023年）
下：津波の痕跡が残る栽培漁業センターにて、語り部ガイド（福島県 大熊町、2023年、福島大学職員撮影）

## アーカイブ・フィールドとして

わたしの家は、福島県内を除染して出た放射性廃棄物を二〇四五年まで保管する中間貯蔵施設エリアのなかに含まれてしまいました。立ち入る許可を得ながら、今は津波の痕跡や原子力災害の影響が残るそのなかを案内し、語り部ガイドをおこなっています。伝えているテーマはふたつ。ひとつは、自分の経験から次の災害時に生かせる防災教訓。

もうひとつは、原子力災害から、そのうえで成り立つ今の社会に対する警鐘です。東京電力だけを批判して終わる話ではないと、わたしは思うのです。こういった話を自分ごとにしていただくために、中間貯蔵施設エリアについては必要以上の開発はやめて、あの三月一一日をリアルに感じる場をアーカイブ・フィールドとして残し、価値を高めていけたらと思うのです。

# みんぱく回覧板

**イベントの詳細・予約はこちら**

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event/

各イベントについて、詳しくはホームページをご覧ください。

みんぱく創設50周年記念特別展

## 日本の仮面
### ――芸能と祭りの世界

国内各地では、仮面をつけた役が登場する芸能や祭りがおこなわれてきました。本展示では、仮面と人びとの多様なかかわりについて紹介します。

会期　3月28日(木)～6月11日(火)
会場　特別展示館

八朔太鼓踊りのメンドン(鹿児島県 三島村)

■関連イベント
みんぱく創設50周年記念研究公演

## 千本ゑんま堂大念佛狂言 民博公演

念仏狂言である千本ゑんま堂大念佛狂言は、演者が面をつけて、仏教などに関する内容を狂言形式で演じます。本公演では同狂言の念仏芸能、仮面芸能としての姿を紹介します。

日時　4月14日(日)13時30分～16時15分(13時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員400名)
出演　千本ゑんま堂大念佛狂言保存会
解説　宮田勝行(千本ゑんま堂大念佛狂言保存会会長)
司会　笹原亮二(本館 教授)
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
▼友の会先行受付
3月4日(月)～8日(金)、定員80名
お申し込み先　国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▼一般受付
3月11日(月)～4月10日(水)

千本ゑんま堂大念佛狂言(京都府京都市)

みんぱく映画会

## 「島と人とメンドン」

九州の南、薩南諸島の火山の島、薩摩硫黄島には約120名の島民が暮らしています。この島で400年以上も踊り継がれてきた八朔太鼓踊りとそこに登場するメンドン、そして島における人の営みを描きます。

日時　5月3日(金・祝)13時30分～16時30分(13時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員400名)
上映作品　「島と人とメンドン」
司会　福岡正太(本館 教授)
解説　藤岡幹嗣(監督／立命館大学教授)
座談会　笹原亮二(本館 教授)、藤岡幹嗣(監督／立命館大学 教授)、室之園晃徳(三島村教育長)、佐藤央隆(三島村教育委員会事務局)、徳田保(硫黄島八朔太鼓踊り保存会 会長)
参加費　要展示観覧券(イベント参加費は不要)
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
▼友の会先行受付
3月25日(月)～29日(金)、定員80名
お申し込み先　国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▼一般受付
4月1日(月)～30日(火)

八朔太鼓踊り(鹿児島県 三島村)

みんぱく創設50周年記念企画展

## 「水俣病を伝える」

熊本県の水俣・芦北地域では、水俣病の教訓を後世に伝えていく活動がおこなわれています。本展示では、こうした活動の意味と課題を考えます。

会期　3月14日(木)～6月18日(火)
会場　本館企画展示場

水俣病を語り継ぐ会による朗読会

■関連イベント
ワークショップ

## 水俣の海を感じる
### ――語り部講話とシーグラス体験

日時　3月30日(土)13時～15時50分(12時30分開場)
会場　本館展示場、本館2階第3セミナー室(定員18名)
講師　平井京之介(本館 教授)、吉永理巳子(一社)水俣病を語り継ぐ会 代表理事)、吉永利夫(一社)水俣病を語り継ぐ会 理事)
対象　中学生以上推奨
参加費　500円(大学生・一般の参加者は要展示観覧券)
※事前申込制(定員に達し次第受付終了)、先着順

みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)のワークショップ

## 点字体験ワークショップ

日時　3月9日(土)、4月13日(土)12時～15時30分(最終受付15時)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

国立民族学博物館 広報・IR係
電話　06-6878-8560(9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form/



みんぱく創設50周年記念
国際シンポジウム

## 海域からみる人類の文化遺産

本シンポジウムでは、民博によるこれまでの研究成果に加え、海域という新たな視点からみた文化遺産と人類をテーマに、その総合的な検討と新たなネットワーク形成を目指します。

日時　5月11日(土)、12日(日)10時30分～16時30分(両日10時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)
趣旨説明　小野林太郎(本館 准教授)
国内外で活躍する計14名による発表(日英での同時通訳あり)
第1部　有形文化遺産の現状と博物館
第2部　オセアニアのカヌーと文化復興
第3部　樹皮布とカジノキ――起源・伝統・アート
主催　国立民族学博物館
共催　NIHUグローバル地域研究推進事業「海域アジア・オセアニア研究」

【申込期間】
3月1日(金)～5月2日(木)17時
※事前申込制、先着順、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます(定員500名)。
詳細は二次元コード(QR)から

お問い合わせ先
シンポジウム事務局
(千里文化財団)
50thsympo@senri-f.or.jp

本館展示のリニューアル

アフリカ展示場が一部リニューアルしました。新しい資料も加わり見ごたえのある展示になっています。また南アジア展示場は3月7日(木)まで一部閉鎖していますのでお気をつけください。

## みんぱくゼミナール

会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名
※事前申込制、先着順、参加無料
※当日参加受付あり(定員80名)

第543回
3月16日(土)13時30分～15時(13時開場)
**「水俣病を伝える」**
講師　永野三智((一財)水俣病センター相思社 常務理事)
平井京之介(本館 教授)

【申込期間】
▶一般受付　3月13日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第544回
4月20日(土)13時30分～15時(13時開場)
**日本の仮面**
講師　笹原亮二(本館 教授)
全国各地で演じられ、伝承されてきた芸能や祭りでは、じつにさまざまな仮面が用いられてきました。そうした日本の仮面の多様性に富む全体像を、「仮面の歴史」「祭りや芸能の中の仮面」「仮面の諸相」「ヒーローと仮面」といった特別展の構成に即して紹介します。

【申込期間】
▶友の会先行受付
3月11日(月)～15日(金)(定員80名)
お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▶一般受付　3月18日(月)～4月17日(水)

## みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

会場　本館展示場(ナビひろば)、企画展示場など
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(イベント参加費は不要)

3月10日(日)14時30分～15時15分
**新規に加わったパキスタン資料をもう少しじっくり見たくなる話**
話者　吉岡乾(本館 准教授)

3月24日(日)14時30分～15時
**企画展「水俣病を伝える」**
**――フィールドワーク展示の試み**
話者　平井京之介(本館 教授)

3月31日(日)14時30分～15時30分
**みんぱっく「韓国パック」のリニューアル・プリビュー**
**――こどもの伝統衣装**
話者　諸昭喜(本館 助教)

## 友の会
講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先　国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話　06-6877-8893(9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp　https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

## 友の会講演会

参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第546回　3月2日(土)13時30分～15時
**周縁から読み解く文明の形成**
**――神殿と文明のかかわりを探る**
講師　松本雄一(本館 准教授)

第547回　4月6日(土)13時30分～15時
**ベトナム中部高原のゴング文化**
講師　柳沢英輔(京都大学 特任助教)
ゴングは東南アジア各地で宗教的な儀礼の際に演奏される神聖な楽器です。ベトナム中部高原では、先住少数民族がゴングセットを受け継ぎ、村落の儀礼・祭礼において演奏に使用しています。本講演ではゴングがどのように作られ、調律され、演奏されているのかについて、現地で撮影した映像や録音をご紹介しながら解説します。

※事前申込制、先着順(定員50名)
※オンライン配信はありません。

第136回　3月23日(土)13時30分～15時
**生まれかわりを信じるということ**
**――モンゴルの輪廻転生を巡る語りから**
講師　島村一平(本館 教授)
会場　モンベル御徒町店4階サロン
現在、多くのモンゴル人はチベット仏教的な輪廻転生を信じています。人が亡くなって49日が過ぎると、黒子や痣を目印に転生者を探すのです。本講演では、モンゴルの輪廻転生に関する普通の人びとの語りを紹介していきます。彼らの語りを通じて、転生が本当なのか、気持ちに揺れをもちながらも、人が死の悲しみを新たな生への喜びへと転換していく姿を描き出していきます。

## 東京講演会

友の会会員：無料、一般：500円

推しコレ図鑑

# アーユルヴェーダ化粧品で もっと癒されたい！

松尾 瑞穂（まつお みずほ） 民博 准教授

## インドの身近な健康法

このたび、みんぱくの南アジア展示場に「健康と癒し」にかかわるコーナーが新しく加わった。

インドの健康法といえば、ヨーガやアーユルヴェーダが有名である。アーユルヴェーダは、長い年月にわたって受け継がれてきた伝統医療だが、現代のアーユルヴェーダを見てみると、おもに三つの方向にわかれているように思う。ひとつは、家庭での薬草やスパイスの利用といった日常生活とのかかわり。喉が痛ければハチミツにウコンとショウガを混ぜて飲む、胃のむかつきにはクローブ……というように、台所に常備してある身近なスパイスは、人びとの健康管理にも欠かせない。

ふたつめは、アーユルヴェーダ医師の指導の下でおこなわれる医療行為。公的に制度化されたアーユルヴェーダは、医学部で教えられており、エビデンスベースで慢性病やがんなどの治療の研究が進んでいる。薬局で手に入る薬も、基本的には医師の処方に基づくものだ。

三つめがアーユルヴェーダの高級商品化で、ここで詳しく紹介しよう。

## 見て使ってマダム気分

近年のアーユルヴェーダ製品は、伝統的な薬草やスパイスをベースにしたシャンプーやマッサージオイル、基礎化粧品など種類も豊富で、現代の消費者の嗜好（しこう）にマッチする商品構成になっている。デザインもおしゃれで高級感があり、おもに都会のショッピングモールや空港で売られている。このような高級志向のアーユルヴェーダ製品は、インドの中間層をターゲットとして、伝統医療がどのように商品化されていくのか、という点からも興味深い。

アーユルヴェーダ化粧品のショップ店内風景
（インド カルナータカ州ベンガルール、2023年）

素敵だけど高そうだなあ、とお店を横目に見ていただけのわたしだが、あるときホテルのアメニティで出会い、翌日の髪の調子のよさに感動して、使い始めた。正直のところ、シャンプー1本で2000円以上、と決して安くはない。それでも、「わたしも使っている」というマダムに会うと、中間層の購買力の向上を実感する。わたしはといえば、たまに自分へのご褒美でちまちまと使っているだけなので、あまり癒し効果が感じられないのが辛いところだ。

**伝統療法用 ケアセット**
標本番号｜H0327323
地域｜インド
展示場｜南アジア展示場
3月8日（金）より公開

### ✦ 推しコレポイント ✦

アーユルヴェーダの伝統的な製法に基づいた基礎化粧品のギフトボックス。その中身はもちろんのこと、箱のデザインも可愛らしくて、もらってもきっと捨てられないはず。ちなみに、展示資料からもかすかにいい匂いがするよ！

地方豪族の旧邸だからこそ

# オギェン・チョリン博物館（ブータン）

宮本 万里　慶應義塾大学 准教授

伝統文化の保護を国是とするブータンでは、二〇〇〇年代初頭に、突如博物館の建設熱が高まっていた。その多くは、一七世紀の見張り塔や築一〇〇年超の農家や領主の邸宅など、歴史的な建造物をそのまま利用したものだ。内部を覗くと、素朴な展示品以上に、地下牢と望楼を備えた建物の構造や、土壁や岩壁に小さく切られた窓からの眺望、分厚い岩壁の湿り気を含んだ匂い、床の木板の軋む音、階段の使い込まれた手すりの感触などに五感を刺激される。

二〇〇五年秋、調査のために訪れた東部ブムタン県最奥のタン渓谷で、同地の豪族の屋敷を改装した博物館に立ち寄った。さすが第二代国王ジグメ・ワンチュク（一九二六～五二年）の時代に緊急用穀物の貯蔵責任を担ったオギェン・チョリン一族の屋敷である。巨大な陶器の水瓶や、徴税品の穀物等を保存する大きな籠や木箱が並び、寒冷地では希少な米を貯蔵する専用の倉庫も設えられていた。再現された領主の部屋ではブータン式の座椅子の前に文具や、手紙や書類に封をするための蠟燭や印璽が整えられ、執務室の趣が醸しだされていた。集落を見渡すように建設された屋敷の窓からは美しいタン渓谷が一望でき、吹き上げる風が丘を登って汗ばんだ額を掠めた。

敷地内には四階建の寺が併設され、地域ゆかりの仏教聖者像が祀られていた。チベット仏教では八世紀に第二のブッダとも目されるグル・パドマサンバヴァが、後世の仏教復興を見据えて多数の宝典を地中に封印した。その埋蔵法典（テルマ）を発見した聖者の一人が一四世紀のドルジ・リンパであり、一族はその系譜に連なるチェジュ（宗教伝統の保持者）だという。

展示物の質は不統一で、当時は説明文も少なく、展示方法も少し大雑把だった。しかし一族の歴史や背景を照らし合わせると、ときの豪族の個人的な交易史や当時の物流、仏教聖者を介したチベットとの交流、領主と小作人たちとの多元的な関係性が浮かび上がってきた。一族の家族史と地域史とを結ぶこの場所は、日本でいう郷土資料館のようなものかもしれない。そこでは、単線的な国史や匿名性の高い国立博物館の展示からはしばしば排除される、周縁地域で名前をもつ人びとの歴史や文化を垣間見ることができるのだ。

上：敷地中央に建つ塔。元の建物は1897年の地震で崩壊し、再建された
下：領主の執務室を再現した部屋。筒には来客用の酒が用意されている
（どちらもブータン ブムタン県、2023年、プンツォ・テンジン撮影）

オギェン・チョリン博物館はブムタン県ジャカールから車で約1時間のタン渓谷にある。自然光によりもっとも展示が映える9～14時ごろの観覧がおすすめ。公式サイトwww.oling.bt

# 女神はロバに乗って

中野歩美（なかの あゆみ）
中京大学 講師

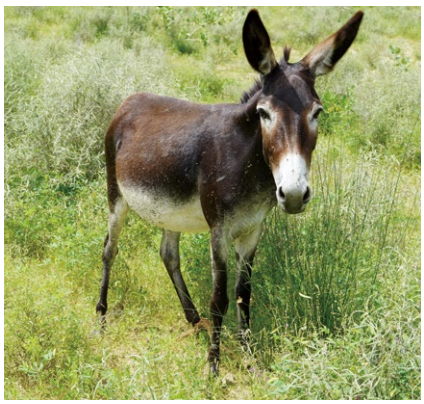
インド北西部のタール砂漠地域に暮らす遊芸民のジョーギーは、かつて移動生活を送っていた。移動の際にもっともよく使われたのは、砂漠の過酷な環境にも耐えることのできるロバやラクダだ。ロバは背中に荷物を載せて運ばせる駄獣として、ラクダは荷車を引かせる輓獣（ばんじゅう）として利用する。そのため、長い距離を歩くのが大変な子どもや老人以外はみなロバやラクダと一緒に歩いた。

現在も半定住生活を送っているジョーギーの男性と彼のラクダ。後ろに荷車が見える
（インド ラージャスターン州バールメール県、2014年）

現在は、現地でもエンジン駆動の車両が普及したことで、ロバやラクダなどの使役動物を使った荷物の運搬は前近代的とみなされつつある。それでもなお、ラクダは道路が整備されていない砂漠の集落に荷物を運ぶために不可欠であり、近年は観光資源としての需要も見出（みい）だされている。

それに対してロバは、もはや家財として増やしたり取り引きしたりする対象にさえならないようだ。調査を始めた二〇一〇年以来、筆者は現地でロバを使った荷物運搬を一度も見たことがない。調査地のジョーギーたちに聞けば、定住してしばらく経った後、不要になったラクダは人に売ったが、ロバは「ただ手放した」と誰もが口をそろえる。

だが二〇二二年、今でもロバを所有しているというジョーギーに初めて出会った。彼によると、かつては移動するためにロバを飼っていたが、現在はそうではない。「シータラー・マーターの乗り物がロバだからだよ」と彼は笑顔で言った。シータラー・マーターは痘瘡（とうそう）を癒す女神として崇拝されている。疫病退散や子どもの水疱瘡（みずぼうそう）の平癒祈願をするために、近隣の村や集落の人びとが今でもときどき彼のもとを訪れるそうだ。



飼っているロバを見せてもらった。遠くに行きすぎないように前後の左足を紐でつないでいる
（インド ラージャスターン州バールメール県、2022年）

このように、ロバは人の移動という役目は失ったが、痘瘡平癒の女神シータラー・マーターの乗り物として、今でも現地の人びとの信仰の世界に深く根づいた存在であり続けている。

だって調査だもの

# 人食いワニよりおそろしいもの

福田雄介（ふくだ ゆうすけ）　オーストラリア・ノーザンテリトリー政府 研究職員

調査中に観測した全長5メートル超のイリエワニのオス（オーストラリア ノーザンテリトリー、2021年）

## 全長五メートル、体重五〇〇キロ

オーストラリア北部のノーザンテリトリーとよばれる地で、野生のワニ専門の研究者として働き始めて一六年になる。わたしのおもな仕事のひとつがワニの頭数モニタリング調査だ。夜間に長さ四メートル足らずの小型船に乗って、川や沼に潜むワニを探すのだ。

真っ暗な水面をライトで照らすと、光を反射したワニの目が小さく赤く輝く。その赤い目を見つけるたびに、船で限界ギリギリまで近づいていく。数メートルまで近づいたところで、一頭ずつワニの大きさを目測し、時間や位置情報とともに記録していく。調査の対象のイリエワニはワニ類最大のクロコダイル種で、オスの大きな個体だと全長五メートル、体重五〇〇キロをゆうに超える。

## あわや遭難！

自分たちの乗っている船よりも大きなワニに近づいて「危なくないのか？」とよく聞かれるが、今までワニに襲われそうになったりしたことは一度もない。むしろ調査中に命の危険を感じるのは、船が故障して遭難しかけたり、不注意で事故を起こしそうになったときだ。

ある年には、川で船のエンジンが突然止まって帰れなくなってしまった。不幸中の幸いだったのは、そこが川の最上流部で、河口から海に流されずにすんだことだ。周囲何十キロメートルは誰も住んでおらず、マングローブの森が広がっているだけなので、通常の携帯電話の電波はもちろん届かない。しかし、こういった非常時のために世界中どこからでもかけられる衛星携帯電話を職場から持たされている。深夜の一時を過ぎていたが、さっそく同僚のレンジャーに助けを求めた。家で寝ていた同僚は別の船を四輪駆動車でけん引しながらすぐに駆けつけてくれた。

とはいっても、我々のいる川は町から一〇〇キロメートルも離れていて、船を降ろせる船着場から上流部まではさらに五〇キロメートルほど川をさかのぼらなければならない。助けの船が到着したころには朝日がとっくに昇って明るくなっていた。それまでのあいだ、まだかまだかと救助を待ちながら、寒く狭いボートの上で蚊に刺されながら一晩明かしたのは今でも忘れがたい体験だ。

上：四輪駆動車に牽引される調査船
下：川岸にたたずむアジアスイギュウ
（どちらもオーストラリア ノーザンテリトリー、2023年）

## このときばかりは死の恐怖

また、別の年には、深夜の三時ごろ、船を操縦していた元上司が疲れて居眠りをしてしまった。眠りに落ちたのはほんの一瞬であったが、幅の狭い川面（かわも）を猛スピードで走っていた我々の船はコントロールを失って、そのままマングローブの木々が生い茂る岸辺に衝突した。船首に立っていたわたしはその衝撃で後ろに転がって、危うく船からワニのいる水中へ落ちそうになった。幸い怪我はなかったが、このときばかりは死の恐怖を感じずにはいられなかった。それ以来、わたしは操縦士が眠りそうになっていないか、常時確認するようになった。

事故といえば、やはり灯（あか）りひとつない真っ暗な深夜の川でスイギュウに衝突しそうになったこともあった。水深の浅いところであったが、川の流れの真ん中に突然黒い小山のような物が水面からあらわれた。何かと思ったら、立派な角の生えたスイギュウの大きな背中であった。間一髪で避けたものの、もしぶつかっていれば船は川の上でひっくり返っていただろう。あたりには人っ子一人いない広大な先住民の土地だったので、すぐに救助をよぶことはできない。つくづく思うのは、調査中いちばん怖いのはワニではなく、我々人間自身の不注意による事故と予測不可能な船の故障なのである。

夕暮れの川面
（オーストラリア ノーザンテリトリー、2023年）

# 極北での救世主、バノック

岸上 伸啓（きしがみ のぶひろ） 民博 教授

わたしは、1984年の夏に初めてカナダ・ケベック州極北地域にあるイヌイットが住むアクリヴィク村を訪ね、狩猟活動や親族関係についての調査を開始した。最初は寒さに苦労するかと思いきや、いちばん苦労したのは食べ物であった。転がり込んだ先は老人夫婦の家であったので、毎食、生のホッキョクイワナやアザラシなどの肉を中心とした食事の連続であった。わたし自身は現地の食が進まず、日に日にやせ細ってしまった。わたしのことを心配してくれた老夫婦には、やせ我慢して、つたないイヌイット語で「大丈夫」と言い続け、安心させようとした。

そのようなわたしの窮状を救ってくれた食べ物として、特に重要なのがバノックとよばれる無発酵パンであった。バノックは、英国から来た毛皮交易者がイヌイット社会にもち込んだものだが、小麦粉にふくらまし粉と水、少量の食塩を加えて練り、フライパンを使ってラードで焼くか揚げるかのいずれかで作る単純な料理である。それは、家によって形や味が微妙に違う、いわゆるおふくろの味である。

当時、どの家を訪ねても食卓の上には、バノックと紅茶の入ったやかんが置かれていた。訪問者はそれらを自由に飲食することが許された。このバノックはそのまま食べてもよいし、ピーナツバターやバター、ジャムを付けてもおいしい。

当時のイヌイットは、朝食をバノックと砂糖を大量に入れた紅茶で済ますことが多かった。肉や魚を中心とした昼食や夕食の後にもバノックを紅茶とともに食べていた。それは軽いうえに、小分けにすることができるので、狩猟にも携帯し、休憩時間や食後に食べた。紅茶とともに食べるバノックは、現地の食事に慣れるまでわたしの救いであった。

あれから40年が経ち、バノックに代わって店舗で購入した食パンをコーヒーとともに食べる人が多くなった。バノックと紅茶はわたしにとって忘れられない食べ物である。

上：ホッキョクイワナを食べる（カナダ アクリヴィク村、1990年）
下：バノック（カナダ アクリヴィク村、2016年）

# 月刊みんぱく 2024年 3月号

第48巻第3号通巻第558号　2024年3月1日発行

編集･発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　園田直子
編集委員　樫永真佐夫（編集長）　河西瑛里子
黒田賢治　島村一平　中川理　松本雄一
制作･協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス紙 FSC® C013678
VEGETABLE OIL INK
GREEN PRINTING JFPI P-B10282


## 『月刊みんぱく』は国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

**『月刊みんぱく』定期購読**
本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。

お問い合わせ

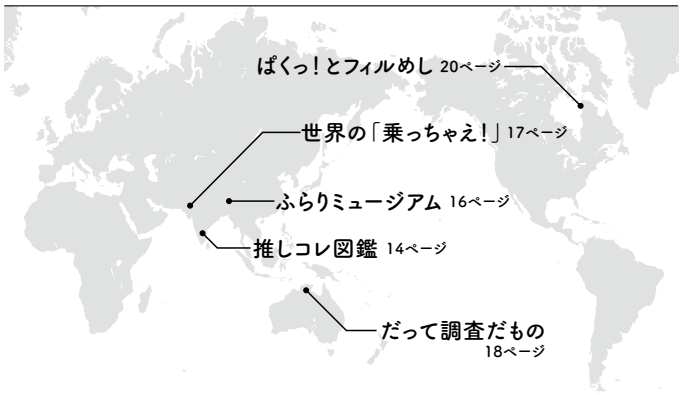
**国立民族学博物館友の会**
みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。
電話 06-6877-8893（平日9:00～17:00）

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会

## 今月号の地図




## 編集後記

「負の歴史」というズシリと重たいことばが表紙にもあるだけに、読者がいきなりアーサー・ビナードさんのユーモアあふれる「巻頭エッセイ」に笑わされ、意表を突かれたと思ったなら、編集者として「してやったり」でうれしい。

文明は幸福の追求の成果である。だが、一方でそれがどれほどの人生に犠牲を強いてきたことか。特集では、そんな災禍の実状を伝える語り部たちの話に耳を傾けた。ぜひ現地に赴いて聞いていただきたい。塗炭の苦しみを経て絞り出される肉声が、きっと将来を幸福に導くのである。

人と人がじかに同じところに身を置くことで交換されるメッセージは力強い。それを強調するのは、自分が現地主義のフィールドワーカーのつもりだからである。とはいえ、とっくにオンラインでつながりを得るのが当たり前の世の中。じつは今月号にも編集委員とのSNS上のつながりからいただいた、ハラハラドキドキのすばらしい原稿がある。新しいつながりに世界はみちている。（樫永真佐夫）

## 次号の予告 4月号

特集「仮面と人」（仮）


国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

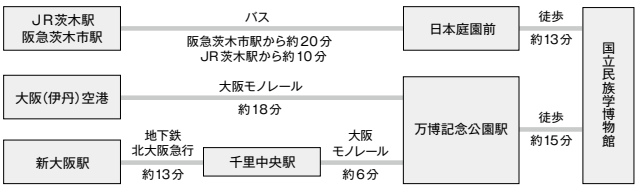
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151


開館時間　10:00～17:00（入館は16:30まで）

休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は直後の平日）
年末年始（12月28日～1月4日）

観 覧 料　一般 580円／大学生 250円／高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス
本館までの交通手段は次の方法が便利です。




みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

みんぱく創設50周年記念特別展

# 日本の仮面
## ――芸能と祭りの世界

**会期** 2024年3月28日(木)―6月11日(火)

**会場** 国立民族学博物館 特別展示館

国内各地では、仮面をつけた役が登場する芸能や祭りがおこなわれてきました。本展示では、仮面の役の登場が印象的な各地の芸能や祭りの様相を中心に、あわせて仮面の歴史、仮面と人間の関係などを紹介し、それらをつうじて仮面と人びとの多様なかかわりについて考えます。

**関連イベント** ※イベントに関する詳細はホームページをご覧ください。

**◉みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう**

4月21日(日)**特別展「日本の仮面」を巡って** 話者:笹原亮二(本館教授)

5月 5日(日)**「八朔太鼓踊りとメンドン」**話者:福岡正太(本館教授)

5月26日(日)**「中東イスラーム世界にも仮面芸能はあった、かもしれない…」**話者:山中由里子(本館教授)

**◉研究公演**

4月14日(日)**「千本ゑんま堂大念佛狂言民博公演」**

**◉みんぱくゼミナール**

4月20日(土)**「日本の仮面」**講師:笹原亮二(本館教授)

5月18日(土)**「東南アジアの仮面」**講師:福岡正太(本館教授)

**◉みんぱく映画会**

5月 3日(金・祝)**「島と人とメンドン」**

**◉友の会講演会**

5月 4日(土・祝)**「仮面とわたし」**講師:吉田憲司(本館館長)

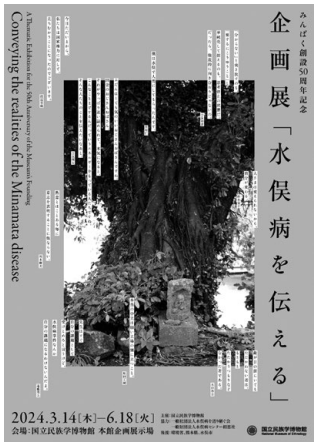
みんぱく創設50周年記念

# 企画展「水俣病を伝える」

**会期** 2024年3月14日(木)―6月18日(火)

**会場** 国立民族学博物館 本館企画展示場

水俣病の発見から70年近くがたちました。現在、熊本県水俣・芦北地域では、展示やガイドツアー、写真、語り部講話などを通じ、水俣病の歴史や被害者の苦しみ、公害の経験をいかしたまちづくりなどを伝える活動がさかんです。どのような人がこの活動をしていて、そこにどういう思いがあるのでしょうか。言葉やモノ、映像、場所はどう活用されているでしょうか。本展では、水俣病を伝える活動の魅力と、そこから学べるものの可能性を探ります。




**関連イベント** ※イベントに関する詳細はホームページをご覧ください。

**◉みんぱくゼミナール**

3月16日(土)**「水俣病を伝える」**講師:永野三智((一財)水俣病センター相思社常務理事)、平井京之介(本館教授)

**◉みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう**

3月24日(日)**「企画展「水俣病を伝える」――フィールドワーク展示の試み」**話者:平井京之介(本館教授)

4月28日(日)**「水俣病を伝える――水俣病センター相思社の事例から」**話者:小泉初恵((一財)水俣病センター相思社職員)、平井京之介(本館教授)

5月12日(日)**「ネコ実験小屋の修復について」**話者:日髙真吾(本館教授)

**◉ワークショップ**

3月30日(土)**「水俣の海を感じる――語り部講話とシーグラス体験」**講師:吉永理巳子((一社)水俣病を語り継ぐ会代表理事)、吉永利夫((一社)水俣病を語り継ぐ会理事)、平井京之介(本館教授)

**◉友の会講演会**

6月 1日(土)**「企画展「水俣病を伝える」の舞台裏――フィールドワーク展示の試み」**講師:平井京之介(本館教授)

**◉みんぱく映画会**

6月 8日(土)**「水俣一揆――一生を問う人々」**解説:吉永利夫((一社)水俣病を語り継ぐ会理事)